

ネルヴァルの『ファスト』解釈

——その訳業の周辺をめぐるつつ

小 沢 晃

1. はじめに —— ひとつの伝説
2. 『ファウスト (第一部)』翻訳の周辺
3. 「1828年の序文」——スタール夫人の陰に隠れて
4. 『ファウスト (第二部)』の翻訳
5. 「1840年の序文」——母たちの国へ

1. はじめに——ひとつの伝説

ジェラルド・ド・ネルヴァルがその文学的閱歴の初期を、ゲーテの『ファウスト』(第一部)の翻訳によって飾ったことはよく知られている。弱冠十九歳の、まさに白面の青年の手に成るその翻訳のめざましい成功と、後年彼を訪れることになる悲劇的な死とのあいだの対照が、その訳業をめぐる幾分の誤伝を生ぜしめたことも致し方あるまい。大部分の事実投ぜられた一部分の虚偽は、幸便に真実性を帯びて後世に伝えられてゆく。我々はネルヴァルの訳業を貶めようとして、このような事柄から始めているのではない。数あるフランスの詩人のうちでネルヴァルほど、言わばその生のかたちを変えられるほどに、ゲーテの『ファウスト』から根底的な影響を蒙った詩人は恐らくあるまい。そのことを思うとき、ささやかではあっても、差しあたりひとつの伝説の指摘とその修整から始めるのは、却っていちばんふさわしいやり方かもしれない。我が国では今だにネルヴァルの仏訳『ファウスト』はゲーテの激賞を得たという

ことになっている。それは殆んど事実であるが、微妙に歪んでいる。あたかもネルヴァルという名前を導き出すための枕詞にも似て、くりかえし唱えられる「作者のゲーテからも激賞された『ファウスト（第一部）』の翻訳⁽¹⁾」という類の、或る意味では比較的他意を含まない言辞も、結果的には文学史的エピソードのもつ面白さのみを増幅し、『ファウスト』とネルヴァルとの関係の性質を吟味しそこなう不都合を与えかねないのである。

そのような伝説の源はどうやら次のごとき評言に求められるようだ。「何を読んでいらっしゃるのですか、先生、とエッカーマンが尋ねた。——わたしの『ファウスト』のフランス語訳だよ。——ああ、あれですね、とちょっと軽蔑的な調子で、聞いたことがありますよ。十八歳の青年だとか……書生っぽい翻訳にきまっていますよ。——十八だって！それでは君、このことをよく憶えて置きたまえ。この翻訳は真に天才的文体家のものだ。この訳者はフランスで最も純粋にして優美な作家のひとりになるだろう。わたしはもうドイツ語で『ファウスト』を読みたくないね。それにひきかえ、この翻訳では一切が再びみずみずしく活力に満ちて息づいている。わたしの本がボッシュエやコルネイユやラシーヌの言葉で引き立っているのだと思うと、誇らしい考えが頭に浮かんでくるね。いいかねもう一度言って置こう。この若者は相当のものになる。⁽²⁾」ネルヴァルの悲劇的な死の後、友人たちは様々に亡友に対する哀悼の文字を記しているが、このミルクルの文章なども半ばは事実を踏まえているだけに、いかにもエッカーマンの言いそりにもない言葉づかいにもかかわらず、一種の真实性を帯びてくることは否定できない。ここに現われているフランス的尊大さひとつを取りあげても、トイトーニヤの地に終生複雑な愛情を抱き続けたネルヴァルにふさわしくないと言うべきだろう。このような、亡友を称揚しようとする意図とフランスの中華思想が結びつくと、テオフィール・ゴーチエの次のような極端な言辞が飛び出してくるのである。「十八歳のとき、彼は『ファウスト』の今や古典的なものになった翻訳を出した。当時まだワイマールのオリンポス山に神の不動もて君臨していた偉大なるヴォルフガング・ゲーテもさすがに感動し、その大理石の手づから次のような言葉をジェラルムに書いて寄こし

た。他方ではきわめて謙虚な彼も当然これには誇らしさを覚え、それをまるで貴族の称号のように持っていたのだった。すなわち、『あなたの翻訳を読んで初めて私は自分を理解しました』⁽³⁾常に文飾過多の傾向なしとしないゴーチエにしても、これは殆んど歴史の捏造に等しいと言うべきであろう。こうした勇み足の証言が折にふれて書き残され、しだいにひとつの常識となって固定化し、^{ついで}終には伝説と化して語り継がれてゆく。

こうした伝説のもたらす弊害を蒙らないようにするためにも、ゲーテがネルヴァルについて触れた唯一の証言を確認しておく必要があるだろう。様々に歪められ勝手に改竄されてきたゲーテの言葉は、エッカーマンの書き留めた『対話』の次の部分に明瞭に記されている。

「ゲーテは1830年版のイギリスの年鑑『キープセイク』を私に見せてくれた。それには実に美しい銅版画と、バイロン卿の興味あふれる書簡が数通掲載されていたので、食後これを読んでみた。ゲーテはその間、ジュラルの手になる『ファウスト』の最近のフランス訳を手にとり、頁をくっては、ところどころ拾い読みしている様子であった。

「妙な気持がするな、」と彼はいった、「五十年前にはヴォルテールの支配していた言葉で、現在もこの本が読まれていることを考えるとね。こういっても、君には私の胸の中を察することができまいね。それに、ヴォルテールやその同時代の偉大な人びとが、私の青年時代にどれほど権威をもっていたか、どれほど道徳の世界全体に君臨していたか、とても理解できないだろうな。この人びとが私の青年時代にどんな影響を及ぼしたか、また彼らから自己を大切に守り、自己ににしっかり立脚して自然と真の関係を保つために、私がどれだけ骨身を削る思いをしたかというようなことは、私の伝記にはあからさまに書かれてはいないのだよ。」

私たちは、ヴォルテールについてさらに話をすすめた。ゲーテは『体系』という詩を暗誦してくれた。それを聞きながら、私は、彼が青春時代にそうした作品を一生懸命学んで、自分の血肉と化していったにちがいない、とひ

そかに思ったものである。

前に書いたジェラルルの翻訳は、大部分散文体になっていたが、ゲーテはじつに見事な出来ばえだといってほめた。「ドイツ語では」と彼はいった、「とても『ファウスト』をもう読む気がしないさ。だが、こういう仏訳で読んでみると、全篇があらためてじつに清新で生气に満ちた印象をうけるね、「『ファウスト』には」と彼はつづけた、「とてつもなくはかり知れないようなところがある。悟性を武器にしていくらあれに近づこうとしても、無駄な話だよ。それに、この第一部というのが、個人のおぼろげな意識の世界から生まれてきている点も考慮しなければならないのだからね。しかし、まさにこのおぼろげなところが人を惹きつけるのだ。あらゆる不可解な問題に取り組む人の例に洩れず、人びとはこれに取り組んで疲労困憊しているというわけだ。」（エッカーマン、『ゲーテとの対話』1830年1月3日付⁽⁴⁾）

長々と引用したのは、これがネルヴァルについてゲーテが語った事実の一切であるからであると同時に、エッカーマンによって書きつけられたこの記述がひとつの首尾一貫した論理を担っていて裁断を許さないからに外ならない。その論理については引用文自体が雄弁に語っているのだから、贅言を要すまい。そこでは、時代精神の変転に対する深い感動と己れの過ぎ去った時間への愛惜の感情とがからみ合っており、そのような感慨のはざまにネルヴァルの仏訳への言及が行われている。„Im Deutschen mag ich den Faust nicht mehr lesen, aber in dieser französischen Übersetzung wirkt alles wieder durchaus frisch, neu und geistreich.“⁽⁵⁾には老ゲーテの内心の深々とした感慨がにじみ出ている。そしてそれと同時にこれがゲーテのネルヴァルの翻訳に対する、必ずしも誉めちぎっているとはかぎらない評価になっている点に注意したい。ここではとりわけ geistreich という語が重大な意味を担って用いられている点に注目すべきだろう。⁽⁶⁾それはすなわち「理性」が勝ち誇った十八世紀のフランスに対する、就中その自他共に許すチャンピオン、ヴォルテールに対する明瞭な当てこすりに外ならず、同時にフランス的な精神の質に対す

る批判にもなっている。

このことは必ずしもネルヴァルにとっては不名誉なことではない。実際そのとき彼は十九歳の客気に駆られた青年にすぎなかった。「私はそれ（『ファウスト』）を訳出したとき、まだ二十歳にすぎなかったのである（引用者注。出版時には二十歳になっていた）。しかし、たとえそれが学生の熱心な勉強の結果にすぎなかったとしても、それには又、部分的には青春の情熱が刻印されているのであり、二十三歳でこの不思議な作品を書き上げた著者の着想自体に呼応することのできた感嘆の念が刻みつけられているのである。このことが恐らく、ゲーテその人からの高い称賛に値いするものにもなったのであろう。」⁽⁷⁾そして同じく次の一節はその間の事情の説明としてもっとも当を得たものと言うべきである。「私自身、初版の誤訳に何度もびっくりして、その後の諸版では多くの条りを、とりわけ多くの若書きの韻文の部分を訂正したのである。しかし恐らくそれは間違いであったのだろう。なぜなら、それらの韻文詩句のものと形は、当時の私の勉学のせいで十八世紀の詩人たちの形式とかなり関係があり、恐らくその点が偉大なる詩人ゲーテをしばしば驚かせ、その考察の一部を誘発したのだろうからである。」⁽⁸⁾ こうしてひとつの伝説は修整される。

ネルヴァルとゲーテの『ファウスト』との関係は、この十九歳のときの『第一部』翻訳とその十二年後の『第二部』の特殊な部分訳とのふたつの訳業を具体的な頂点としているが、その精神の内部にもたらされた根底的な影響は、彼の文学的営為の方向と性質を殆ど決定し、終生影を落とし続けたと言っても過言ではあるまい。その独特の『ファウスト』解釈は、初期の比較的深みを欠いた思考はさておき、1840年に至って、特殊な歪みと無理解とを引きずりつつもその内部においては鋭く首尾一貫した独創的な展開を見せる。本稿はその関係の現場を、訳業の実態に一瞥をくれつつ、その初期から1840年の「序文」までを幾分丹念に追うことを内容とするが、ネルヴァルの作品における「ファウスト的テーマの展開」はそれ自体多くの作業を要求する事柄であるから、ここでは特に必要でない限り敢えて触れないことにする。⁽⁹⁾

2. 『ファウスト (第一部)』翻訳の周辺

前述のごとく、ネルヴァルが『ファウスト(第一部)(Faust, eine Tragödie)』を出版したのは1828年のことであるが、その訳出に従事したのは1826～27年にかけてのことであるとされている。⁽¹⁰⁾すなわち十八歳から十九歳にかけてであり、このとき彼はシャルルマーニュ高等学校 Lycée Charlemagne の通学生であった。『ファウスト』という難物を大胆にも翻訳しようと企て、若きベルリオーズ Berlioz によって作曲されるほどに世の好評を得た、その訳者のドイツ語の学力が客観的にどの程度の水準のものであったかということは、興味深い事柄であるに違いない。しかし残念ながら、その点を明瞭に示す材料は存在しない。残された『ファウスト』の訳文こそ、その資料であるに相違ないが、『ファウスト』の仏訳には当時既に二種類の訳書が存在していたから、ネルヴァルがどの程度まで独自の学力をもってしてその偉業に立ち臨んだものかは、実のところわからないのである。⁽¹¹⁾それどころか、その学力は期待されるよりも低かったと考える方が実際に近いようである。このことは訳文の検討の際に多少明らかにされるだろう。

少年ジェラルドにドイツ語を教えたのは、父親だった。このナポレオンのライン派遣軍の軍医であり、Aukstam, Danzig, Linz, Hanover, Glogau そして Wilna と、ラインの彼方の北方の地を経廻り、傷ついて帰ってきた父親とネルヴァルとの生涯にわたる心理的葛藤は、残された書簡集に詳しい。その父に宛てて、ネルヴァルがその死の前年の1854年5月31日付けで Baden-Baden から書き送った手紙に、「僕にこの言葉を教えてくれたのはお父さんでした。だから僕が自分の翻訳で得たわずかばかりの名声もお父さんのおかげなんです。(……)」⁽¹²⁾とあることから、確かであろう。また死ぬ前年に書かれた美しい過去への旅路の書『散策と回想』Promenades et Souvenirs の第5番「幼い頃」に「私はイタリア語とギリシャ語とラテン語とドイツ語とアラビア語とペルシャ語を同時に勉強していた。」⁽¹³⁾と記されているが、それも又彼がかなり早い時期からドイツ語に接していたらしいことを証明している。なかでも、この

事に関して1850年に書かれた戯文的な新聞記事の一節は興味深い。「(……) デュマよ、お許しあれ！僕は今幾分ドイツ的流儀であなたに書いているのだ。でも外のやり方ができないのだから仕方がない。このラインの向う側に足を踏み入れるや、僕はハインリッヒ・ハイネがイタリアを眼にして歌ったティララーというやつを口づさんでいるのだからね。それでフランス語をちょっと忘れたというわけだ。もっともドイツ語もあまりできないけれど。なにしろ僕は、ひとが学問語を研究するみたいにこの言語を習ったのだ。最初から語根だとか高地ドイツ語だとか古シュワールベン方言だとかから始めたのだ。従って僕は当地では、人から意地悪く本国人を紹介されたりする、あの中国語やチベット語の先生方に似ている訳です。たぶんやろうと思えば、誰かドイツ人に僕の方がお前よりドイツ語にかけては詳しい証明できると思うのだが、それを相手にドイツ語で説明することほど、僕にとって困難なことはないのですよ。」この、ネルヴァルのひとつの側面である軽快な戯文は、冗談のうちにへり下りつつ自負するという類の手の混んだ自慢などではなく、それが偽らざる所だったからに違いない。詩集の仏訳を通じて交友を結んだハイネは、ネルヴァルの傷ましい死を追悼しつつ、次のような友愛の言葉を残している。「私は深い感動を覚えずに、1848年3月の幾夜々に想いを致すことはできない。その頃、やさしく穏やかなジェラルムは毎日、ラ・サンテ病院の柵の中の私の隠れ場所にやってきて、一緒に私の平和なるドイツ的夢想の翻訳の仕事にひっそりと従事してくれたのだった。ところがその時、私たちの周囲ではあらゆる政治的熱情が咆哮をあげ、古い世界がすさまじい物音を立てて崩壊しつつあったのだ。(……) ジェラルムはまことに、ひとりの人間というよりはむしろひとつの魂だった。平凡な言葉ではあるが、天使のような魂と言おう。この魂は本質的に共感的な魂だった。あまりドイツ語を解さなかったが、この言語の研究を一生の仕事とした人々よりもずっとよく、ドイツ語で書かれた詩の意味を見抜いたのである(……)』⁽¹⁵⁾美しい弔意の言葉は更に続く。

さて、20年後にさえ「あまりドイツ語を解さなかったが」と評される学力で『ファウスト (第一部)』を翻訳したということは、殆ど驚異的とさえ言える

だろう。しかしここで忘れるべきでないのは、既述のごとく、『ファウスト（第一部）』の仏訳には二種類の先例があったということである。きわめて拙撰な翻訳者と評されている le comte de Saint-Aulaire は、Ch. Dédéyan によれば自らの翻訳態度を臆面もなくこう語る人物である。「結局のところ、もし何の意味も表わしていないものが言葉ではないとしたら、幾つもの意味を表わしているのはフランス語ではない、ということである。このふたつの考えに拠って私はこの作品の翻訳に従ったのであって、何ヶ所もの条りを、とりわけ相当長いふたつの場面の訳出を断念せざるを得なかったのである。なぞなら、私にはそれらを理解することが不可能だったからである。多くの文が何の意味も表わして、その場面の全体的な意図は私に何の手がかりをも与えてくれなかった。⁽¹⁸⁾ 驚くべきことに、自分が悪いのではなくゲーテがいけないのだと言っているわけである。もうひとりの翻訳者ははるかに立派であった。しかし、その駐仏スイス大使の息子はこの国の人間の常として独仏両語に等しく通じていたに相違ないが、bilinguiste 通有の弊害の故に、原作を美しく裏切るということを知らない。一例を挙げてみよう。有名な、Margarete がたんすの前で衣服を脱ぎつつうたう歌、⁽¹⁷⁾

«Es war ein König in Thule
Gar treu bis an das Grab,
Dem sterbend seine Buhle
Einen goldnen Becher gab.»

⁽¹⁸⁾
(2759-62)

Stapfer の訳ではこうである。

«Il fut un roi fidèle
Jadis au Labrador
A qui, mourant sa belle
Remit un vase d'or»⁽¹⁹⁾

このようなものを透明な翻訳ととても称するのであろうか。ドイツ語とフランスとの双方に義理立てした結果、訳文は甚だるおいを欠いている。ネルヴァル訳はこうなる。

«Autrefois un roi de Thulé
 Qui jusqu' au tombeau fut fidèle,
 Reçut, à la mort de sa belle,
 Une coupe d'or ciselé.»⁽²⁰⁾

リズムと詩情は格段に秀れていると言うべきであろう。しかし、ネルヴァルがこの比較的生硬な感を否み難い Stapfer 訳を参考にして意味の正確を期しつつ、自分では専ら文学的効果に意を用いたと推測するのも、あながちありえないことではない。例えば «Er schlägt das Buch auf (….)» (429) を驚いたことに «Il frappe le livre...» と訳してしまうドイツ語の力であれほどの訳業は成立しないと考えるのは当然ではあるまいか。

ネルヴァルの訳文を評してあるものはこう述べている。「形式に配慮し、原文の思考を大胆に追うかと思えば、大胆に創りなおし、訳者と原作者の思考が相違するところでは驚くべき誤訳を犯す、(……)»⁽²²⁾ 若干の典型的な例を挙げてみよう。「天上の序曲」のきわめて有名な一句 «Es irrt der Mensch, solang' er strebt.» (317)。必然的に過誤に陥ることを運命づけられつつも、高きをめざして努める人間存在の根源的な性格を規定して、そこに救済の可能性を予告するこの重要な一句⁽²³⁾に対して、若きネルヴァルが素気なく与えた訳文は、«Tout homme qui marche peut s'égarer.»⁽²⁴⁾である。ここではゲーテの思考の本質的な要素があっさり切り捨てられ、緊張した人間認識が生ぬるい警句に変じてしまっている。1840年に『第二部』を翻訳した時も同様の思考の微温化をくりかえしているから、ネルヴァルがこの streben という語に何の特別な意義をも読み取らなかったことは確かである。さらに次のような例も、ネルヴァルあるいは一般的にフランス的精神の clarté 志向が陥りやすい間違いのひとつ

であろう。「書齋」の場面でムク犬から遍歴学生に変じたメフィストーフェルスが昂然と言い放つ台詞、

«Ein Teil von jener Kraft,
Die stets das Böse will und stets das Gute schafft.»
(1335-36)

これがネルヴァル訳では、
«Une partie de cette force qui tantôt veut le mal et tantôt fait le bien.»⁽²⁵⁾
となる。信じ難いことに stets が tantôt と訳されているが、これは語義を知らなかったとか不注意に誤訳したなどという単純な事情によるのではなく、彼にとって善と悪とがこのように、事物の生成と消滅との宇宙論的把握として関係づけられる必然性が了解できなかったからに外なるまい。こうして、この種の誤読、歪曲はネルヴァルの思考がゲーテのそれを深く追っていない場合に歴然と現われてしまうのである。

あるいは又もっと単純に、語義の解釈に苦しんで、次のごときでっちあげを行った例。

«Und dem verdammten Zeug, der Tier-und Menschenbrut,
Dem ist nun gar nichts anzuhaben:» (1369-70)
«Nous n'avons rien à gagner sur cette maudite semence, matière des
animeaux et des hommes.»⁽²⁶⁾

これは Zeug を文字どおり matière と解し、Brut を semence の意味にこじつけ、自分でも何がなにやら分からぬまま、もっともらしいでっちあげを行なったものであろう。

しかし、このような奇怪な訳文が稀であると同時に、根本的な誤訳も比較的わずかであることは事実である。それどころか通常は、あるいはそれがもっとも

重大な間違いであるのかもしれないが、フランス文特有の *clarté* と *limpidité* とが若々しい息吹きとリズムとに担われて、美しく躍動している。とりわけ、若きゲーテの詩情と、同じく若きネルヴァルのそれとが見事に手を取りあった幸福な場合には、奇跡的に美しい訳文が生まれる。ここではその典型的な場合として、先に冒頭の部分を掲げたマルガレーテの歌の全詩句を対比することで、それらを代表させることにしよう。詩節ごとに対比してみる。

«Es war ein König in Thule
Gar treu bis an das Grab,
Dem sterbend seine Buhle
Einen goldnen Becher gab.»

(Autrefois un roi de Thulé
Qui jusqu'au tombeau fut fidèle,
Reçut, à la mort de sa belle,
Une coupe d'or ciselé.)

«Es ging ihm nichts darüber,
Er leert' ihn jeden Schmaus;
Die Augen gingen ihm über,
So oft er trank daraus.»

(Comme elle ne le quittait guère,
Dans les festins les plus joyeux,
Toujours une larme légère
A sa vue humectait ses yeux.)

«Und als er kam zu sterben,

Zählt' er seine Städt' im Reich,
Gönnt' alles seinem Erben,
Den Becher nicht zugleich.»

(Ce prince à la fin de sa vie,
Lègue tout, ses villes, son or,
Excepté la coupe chérie,
Qu' à la main il conserve encor.)

«Er saß beim Königsmahle,
Die Ritter um ihn her,
Auf hohem Vätersaale,
Dort auf dem Schloß am Meer.»

(Il fait à sa table royale
Asseoir ses barons et ses pairs,
Au milieu de l'antique salle
D'un château que baignaient les mers.)

«Dort stand der alte Zecher,
Trank letzte Lebensglut,
Und warf den heiligen Becher
Hinunter in die Flut.»

(Alors, le vieux buveur s'avance
Auprès d'un vieux balcon doré;
Il boit lentement, et puis lance
Dans les flots le vase sacré.)

«Er sah ihn stürzen, trinken
Und sinken tief ins Meer,
Die Augen täten ihm sinken,
Trank nie einen Tropfen mehr.»

(Le vase tourne, l'eau bouillonne,
Les flots repassent par-dessus;
Le vieillard pâlit et frissonne...
Désormais il ne boira plus.)⁽²⁷⁾

韻律を調えるために、原詩に存在しない語を創り出している個所が幾つか見られるが、殆どドイツ語の原詩を背後に感じさせない、朗誦に耐えうるこなれた訳詩と言えよう。総じてこの種の民謡調の诗情や自然の景物の美しい描写と
いった、年若い翻訳者の功名心を促すに足る部分では、見事な訳文が生まれ、
深い緊迫した思考に係わる糸りで著しく齟齬をきたすという評価は正しい。し
かし、このような欠点は翻訳者の十八・十九という若さを考えたとき、殆ど避
け難いことだったとする外はないであろう。

ネルヴァルは『ファウスト（第一部）』翻訳の二年後に、『ドイツ詩集』
(Poésies allemandes, Klopstock, Goethe, Schiller, Bürger, morceaux
choisis et traduits par M. Gérard, 1830) と題する選詩集を出版し、フラン
スの数少ないゲルマニストのひとりとして文芸の世界で名声を得るようになる。
J. Richer は年若いネルヴァルのそうしたドイツ文学訳業の舞台裏を推測して
「ネルヴァルはドイツ詩の自分以前の翻訳を常に考慮していたらしく、めった
に自分が最初の翻訳者になる危険を犯さないようにしている。」と述べている。
すなわち、手本のないものは訳さないということである。実際、彼の指摘によ
れば、ネルヴァルが Bibliothèque Nationale から1830年に二度にわたって、
ドイツ文学選集の類を借り出した形跡があるとのことである。⁽²⁸⁾従って、それ以
前にも借覧参照したことは充分ありうることだろう。というのは、ネルヴァル

訳『ドイツ詩集』の大半が既にそれらの書物に訳出掲載されているからなのである。そのようにしてまでドイツ文学の翻訳を企てたには相応の理由が考えられるが、一面では年若い文学青年の修業感覚や功名心が大いに働いたことも確かであろう。『ファウスト』に関しては、先に触れた Sainte-Aulaire の翻訳を批判した次のごとき一文がネルヴァルの眼に入ったはずで、これが青年の野心を刺激しなかったはずはない。「(……) ゲーテは、ペトラルカがイタリア語において、ラシーヌがフランス語において、ソフォクレスがヘレナの言語においてそうであったごとく、おのれの文体の主である。私には、サントーレル氏が訳書の序文で述べているがごとき、言うところの曖昧さや難解さなどそのどこにも見つからない。各々の言語には特質というものがある。その特質をその言語から奪い去ろうとしたり軽んじたりするのは奇怪な権利の濫用であるか滑稽なあやまりである。翻訳者の責務とは、思考の簡明さによってそれを《フランス語》にすることであって、そうすればこそ、異った言葉においても、明瞭で確たる意味を与えることができるのだ。ソフォクレスでもいい、アイスキュロスでもいい、それらを母国語の特質に顧慮することなく奴隸的態度で訳してみるがいい。そうすればゲーテを再現しようとしてそうになっていると全く同様の曖昧さに陥るだろう。もし訳者にかの作者たちの精神のしなやかさも力強さもなく、又彼がその神々しい言葉に通じていなければ、そうなる外はない。一般的に言って、人がラインの彼方の秀れた作家たちのいわゆる曖昧さについて言い立てていることのすべては、しじゅうくりかえされる誤解にすぎないのである。(……) ゲーテはドイツ人にとって、ラシーヌがフランス人にとってそうである以上に曖昧ではないのである。」⁽²⁹⁾これが恐らく、ドイツ語力の拙なさにもかかわらず、若きネルヴァルの自恃の念を刺激して、『ファウスト』翻訳を企てせしめた外的要因であったのかもしれない。

しかしここで、ドイツとさらにその北方の国々が、ネルヴァルにとって特殊な感情の対象であったことを想起するべきであろう。後に再度言及するはずであるが、言わばネルヴァルにおける「母のテーマ」とでも称すべきものが既に問題になるのである。それが様々な変容を経つつも彼の文学の基本的なモチー

フとしてその内部を支配していることは常識にすぎない。「だが向う岸、彼方の地平線に(……)何があるか御存知だろうか。ドイツがあるのだ！ ゲーテとシラーの土地、ホフマンの国、古きドイツよ！ われらすべての母よ！……⁽³⁰⁾ Teutonia…」1838年、初めてドイツへ旅したネルヴァルのこの旅行記中の言葉は時代思潮の流行に乗じて軽く発せられた文飾などではない。彼の精神の深層に住みついた特殊な憧れとその顕在化、そして後年のその自覚的な文学的追尋、その種子が既に彼の年若い無謀とも言える訳業の奥底に胚胎している。産み落したばかりの幼な子を残して、夫とともにラインの彼方へと旅立ち、シレジアで二十五歳の若い命を落した母への秘かな思慕が、ラインの彼方の土地へと彼の思念を導いたであろう。戦場で若く美しい妻を失った彼の父は、自らも片足を負傷して帰還し、少年にドイツ語の手ほどきをしつつ、その北方の土地と亡妻のことを問わず語り物語ったであろう。彼の『ファウスト』の、とりわけその「第二部」の翻訳と解釈には、そのような事柄への推測を許す明らかかな徴が認められる。

後年のことであるが、死の前年の1854年、ネルヴァルは最後のドイツ旅行へ出かけた。残された書簡から判断する限り、彼は自分の主治医であったブランシュ精神病院長の許可をも得ずに、慌しく出発したらしく、しかも旅の途次、何かしら強い感情の打撃を受けて、狂気の発作に見舞われ、一時パリとの音信を断っている。⁽³¹⁾これについては、その旅途中、それこそが真の目的であったに相違ないが、ポーランドのグログフ(Glogau)の母の埋葬された土地を訪れたらしいことが推測されている。⁽³²⁾この旅行中パリの父親や主治医や知友に書き送られた手紙には、異常な興奮と異常な沈潜とが見られ、まことに傷ましいが、その中で父親にあてられた一通には、ドレスデンそしてライプツィヒまで足を伸ばすことに決めた理由を、しきりにそれらがプラハ、ベルリンへ地の利が良いことに求める不自然な一節が見られる。⁽³³⁾ドレスデンからグログフまで約200 km、馬車なら数時間の距離であることを知るのはこの場合無駄なことではあるまい。

いずれにしろ、このネルヴァルにおける「母のテーマ」それ自体の指摘は目

新しい事実ではなく何等生産的でもないが、後に『ファウスト（第二部）』の翻訳に言及する際、その一層具体的な姿が明らかになり、それがどれほど彼の心理の内奥で結晶化しつつあったかが再度確認されるだろう。

3. 「1828年の序文」——スタール夫人の陰に隠れて

年若い訳者の無謀にもかかわらず、訳出された『ファウスト（第一部）』は、当時のドイツ趣味と「ファウスト物」のパリの興業界における流行に乗ると同時に、その訳文のみずみずしい情熱と「フランス的明晰化」とのゆえに、多大の好評をもって文壇内外に迎えられた。しかしそれに付された、通常「1828年の序文」と言われている解説には、後年、狂気の合間に顕現してくる深々とした、この詩人個有の天才を予告する底の独創性はあまり見当らない。『第一部』しか世に現われていなかった当時、とりわけその「グレートヒェン悲劇」のメロドラマ性（本来の意味での）のみが拡大されて受け入れられていたフランス的ロマン主義の時代にあっては、『ファウスト』劇の緊張性を過たず把握することは、相当困難であったに違いない。しかしそれにも増して訳者の思考経験の未熟ということも、この場合看過すべからざる事情のひとつであっただろう。実際、この序文においては、いまだみずから語る力を持たないこの青年は、中心的な議論の殆どをスタール夫人の『ドイツ論』から借用し、自分をその祖述者の地位に置くことで満足している節がある。しかし、『ドイツ論』がその先駆性と該博性とのゆえに、少くともその当時ラインの向う岸の学問文芸に関心を抱いた者たちのうえに、圧倒的な影響力を及ぼしていた事実を考慮するとき、そのような盲従も致し方のないひとつの階梯であったとみなす外はないだろう。

その『ドイツ論』という先導的書物には、これは避け難いこととはいえ、フランス的な物の見方に由来する誤解や無理解、又逆に行き過ぎた思い入れ等が枚挙にいとまがないといった趣きで溢れている。しかしこの書物がフランス人

の脳裏にドイツに対する独特の「ある牧歌的、哲学的そして詩的な観念、すなわち、本質的に北方の国というイメージ⁽³⁴⁾」を植えつけ、その文化全体に関する新鮮な印象を与えることに成功したのは大きな功績と言えよう。ましてや、それは具体的な作品の抜萃翻訳や注釈を多く含んでいるだけに、一種のドイツ文学・哲学のアンソロジーという趣きを呈しているのであるから、その啓蒙的意義には量りしれないものがあつた。若きネルヴァルがこの書物からどれほどの恩恵と影響とを蒙っているかは、それからの夥しい是認的引用を見ても容易に知ることができる。『ドイツ詩集』に付した長文の解説は、驚くべきことに、直接的連続的引用が全体のほぼ三分の一を占めており、その依存度は少々常識を越えている。

『ファウスト』に付した「1828年の序文」においてもやはりその依存度は際立っている。従つてそれを一瞥することによつて、ネルヴァルの若き日の思考に触れ得ると同時に、夫人に代表されるフランス的ドイツ観、いやこの場合は『ファウスト』観（ただし『第一部』のみ）をも併せて知る、という副産物が得られるわけである。『ドイツ論』においてはその第23章でゲーテの『ファウスト』に関して比較的長文の分析が展開されており、ネルヴァルの借用はすべてその部分に拠っている。しかし高い依存度にもかかわらず、そこにおのずと両者の見解の相違が目立たないながらも存在し、そのささやかな差異が後年のネルヴァルをかすかに予告していると言えなくもない。

若き翻訳者は自らの拙い見解を披歴するよりは、偉大なる夫人の卓説をして語らしめるにしかずと断つた上で夫人を援用する。夫人の意見の明解さと驚くべき無理解はそれ自体一読に値いしよう。「確かに、そこに（『ファウスト』に一筆者注）は、良き趣味や節度や、選別したり仕上げたりする技法を求めてはならない。もし想像力というものが自らに、しばしば描写されてきた物質的混沌のような、そういう知的混沌を想い描くことができるとするならば、ゲーテの『ファウスト』はその時代（ゲーテの「シュトルム・ウント・ドラング」の時代の謂であらう一筆者注）に創られたものに違いないであらう。思考の大胆さではこれ以上行くことはできまい。この作品を読んで残っている記憶には

今でもなお幾分のめまい感が含まれている。悪魔がこの劇の主人公であるが、作者はそれを、よく子供たちに言って聞かせるようなおぞましい幽霊の姿などで表現してはいない。作者は悪魔を、もしこう言ってよければ、意地悪の最たるものとして描いており、その側に置いたら、すべての意地悪たち、特にグレッセのそれ（同名の芝居の作者（1709—1777）—筆者注）など、見習程度にすぎず、ようやくメフィストーフェレス（これがファウストの友となる悪魔の名だが）の下僕になるのが関の山である。ゲーテはこの現でもあり幻でもあるような登場人物の中に軽蔑心が吹きこみうるうちで最も苦い冗談と、それでいて人を楽しませる快活な大胆さとを表わそうとした。メフィストーフェレスの弁舌には、創造物全体を対象とする地獄的なイロニーがあり、それは宇宙を、悪魔がその検閲者となるたちの悪い書物、と判断するのである。⁽³⁵⁾ネルヴァルが敬意をこめつつ援用する夫人の見解は、このように、さっぱりと割り切った、相当合理的な視点を特徴とする。とりわけメフィストを主人公と断定する考え方には時代的な色彩がまわりついており、分析はより多くメフィストの性格規定に集中する。ネルヴァルはその次の、メフィストの知性と悪意の奇妙な結合に触れた段落を割愛し、それをヴォルテールに比定する部分を引きつつ、さらにこう引用を続けるのである。「ミルトンはサタンを人間よりも偉大なものにした。ミケランジェロとダンテはそれに、人間の顔付きと結びついた動物のおぞましい表情を与えた。ゲーテのメフィストーフェレスは文明化された悪魔なのである。彼は、墮落の大いなる深遠さと見事に一致しうる、一見軽いからかいを巧みに操作し、感受性をそなえたすべてのものを馬鹿あるいは気障扱いにする。彼の顔付は意地悪く、低劣で、うわべだけ良い。だが、彼にはへまなところはあってもおずおずしては、軽蔑心はあっても高慢ではない。そして女の側ではなにかしら優しげなところもあるが、それは、この場合だけは、騙して誘惑する必要があるからである。彼にとって誘惑するとは、すなわち他者の情念に奉仕するということであって、蓋し彼には愛するふりさえできないのである。それだけが彼にも不可能な偽装である。」⁽³⁶⁾

こうした引用を重ねて、ネルヴァルは自分の論述を進めていく。夫人のメフ

ィスト解釈は確かに十分に文学的であって、又それが不都合だとするにはあまりにも首尾一貫している。しかし、議論の出発点からメフィストに力点をかけて論理を進めていく結果、『ファウスト』劇の内的緊張性を一顧だにしないという最大の欠陥を露呈してしまうのは必然的であろう。その結果、ファウスト博士は悪魔にもてあそばされる愚かな存在としてしか理解されない。ファウストとメフィスト、この肯定と否定とのふたつの鋭く対立する原理は、「天上の序曲」において既に明瞭に語られているにもかかわらず、夫人の眼にはその本質が一向に見えていない。これは、次のようなネルヴァルが恐らくは注意深く引用を避けた、それどころかほのめかすことさえ警戒した一節に、一層明らかな言辭で語られている。夫人は両者の性格を規定しつつこう論述を進める。「メフィストーフェレスの性格には、社会と自然と驚異との汲めども尽きざる知識を想定させるものがある。この『ファウスト』劇は精神の悪夢ではあるが、精神の力を倍化する悪夢である。そこには、物を信じないという態度の、この世界で良しとされうるすべてに適用されるその態度の、悪魔的な啓示が見られる。そして、メフィストーフェレスの不実な意図によって仕組まれる状況の数々が、もし彼の尊大な言葉に対して恐怖の念をひとに抱かせず、また彼が内に秘めている悪辣さをも知らしめないとしたら、この啓示はたぶん危険なものとなるだろう。」「ファウストはその性格の中に人間性のもつあらゆる弱さを集約している。すなわち、知識を欲して、仕事に疲れ、成功を欲求して、快楽に飽食する。それは変わりやすく移ろいやすい存在の完璧な見本であって、その感情は彼の嘆く短い人の命よりもなお一層束の間である。彼の持っているものは、力よりも野心なのであり、その内心の動揺のゆえに、彼は自然に対して反抗し、ありとあらゆる妖術にすがっては、死すべき人間に課されたつらいがしかし必然的な条件を逃れようとするのである。(……)⁽³⁷⁾」核心をめぐって螺旋状にぐるぐる遠くへ離れてゆく類の夫人のこの見解にはネルヴァルもさすがに同意しなかった。とりわけ後半のファウスト博士の人物規定には、信じ難い誤解と無理解が露呈されている。彼が引用を続けてきた部分に直接続くこれらの部分を、まるで読みもしなかったような調子でネルヴァルは夫人に対して初めて異を唱

えるのである。そしてそこには幾分の独自性が見られなくもない。

「私はこれ以上巧みにメフィストーフェレスを描くのは難しかろうと思う。この解釈はそれに想を与えた当の作品にまことにふさわしい。しかし、ファウストの崇高な性格はその作品自体の外の一体どこに、また、私の弱々しい散文ではとうていその輝きを奪い取れなかったあれらの高邁な冥想以外の一体どこに、よりすぐれて表現されているだろうか。高貴な魂にして、人間精神のあの状態、絶えず神の啓示を熱望し、言うなればその鎖の長さの限りをぴんと張りつめつつ、冷やかな現実があたかも《精霊》の声のごとくにこのみじめな地上に降りきたって、その幻影ないし希望の不敵さに幻滅を与える瞬間まで待ち受けている、人間精神のあの状態を経験しなかったものがあるだろうか。」⁽³⁸⁾ この甚だ明晰ならざる表現には、若いネルヴァルのある種のもどかしさが感じられる。ファウストに仮託しつつ、時には人間の条件を超えて、「神の高みにまで」⁽³⁹⁾ 至ろうとする人間精神の営みと挫折の意義に触れているのは、彼が常にスタール夫人の陰に隠れていたわけではないことを明瞭に示している。また、この文章に漂う明らかにロマン的な心情の表白、とりわけ文中の熱望する aspirer（あるいは憧れる）という言葉は、この場合ドイツ語の streben よりは sehnen の方に質的にはより近く、彼の精神がああ sehnstucht と呼ばれるものに浸されていたことを物語っている。このような精神の型はもはやスタール夫人の理性的な整合的世界とは異質であり、後年『ファウスト（第二部）』の翻訳とその「序文」において示される、ネルヴァルの特異な精神の萌芽として注目すべきであろう。

しかし、そのようなわずかのきらめきを例外として、全体的には彼が夫人に頼り切っていることは確かである。『ファウスト』の結末に触れて、『ドイツ論』は、「グレートヒェン悲劇」を要約紹介した後、こう語っている。「芝居はこれらの言葉の後でぶつり終っている。作者の意図は恐らく、マルガレーテは非業の死をとげるが、神は彼女を許し、ファウストの命は救われるが、その魂は墮落するということであろう。」⁽⁴⁰⁾ 『ドイツ論』の書かれた1810年の段階では『第二部』はまだ影も形もないから、夫人が余りに唐突な結末を怪しんで、こうい

うおぞなりの推測をせざるをえなかったのも仕方あるまい。だが、ある意味ではそれがこの明敏な女性のひとつの限界であったのかもしれない。ネルヴァルはこの点についてどう考えたであろうか。「序文」の一節はこう言っている。「芝居がこのように終わってしまうことに人は驚くであろう。しかし、それに何を付け加えることができたろうか。たぶんそれはファウストが地獄に身を委ねる時が来たということだろう。しかしそのようなことをどう描くというのか。いかにすれば人間精神は、地獄が彼にもっと恐い責苦を用意しているなどと思えることができるだろう。一方からすれば、このようにぶつ切り断たれた結末は読者に、その天才と不幸のゆえに強く同情を感じたあの男が、悪魔の爪を逃れるのだという、心慰む考えを抱くことを許すわけである。彼に天上を回復してやるためには、ひとつの後悔で充分なのだから。⁽⁴¹⁾」スタール夫人の意見に似て甚だ苦しまぎれの印象を与える解釈である。ここでもやはり、ネルヴァルがあゝの「天上の序曲」の深い内容にささかの注意をも払わなかったことが確認される。その無理解は結局後に到っても修整されることはないが、それを補って余りある後のいわゆる「1840年の序文」と、言わば自ら進んでスタール夫人の陰に隠れているこの「序文」とのあいだには、何という対照が見られることであろう。

4. 『ファウスト（第二部）』の翻訳

1840年、三十歳のネルヴァルは『ファウスト（第二部）』を風変りな形態の部分訳として世に送り出した。その時の総題は「ゲーテ作『ファウスト』、その第三版。付『ファウスト第二部』及び「詩歌選」（第二版。新訳）「(Le Faust de Goethe, troisième édition, suivie du Second Faust et d'un choix de ballades et poésies (2^e édition), traductions nouvelles) である。そしてその際付された序文がすなわち「1840年の序文」と呼ばれているものである。これは彼がゲーテのこの壮大な作品の全体に対して蓄えてきた思考の総

決算というべきものであり、その独特の理解の仕方は、それ自体がひとつの精彩ある「ファウスト論」であることはまちがいない。しかしそれにも増して我々の注意を惹きつけてやまないのは、それがその後の彼の人生及び文学の、方向と性質をくっきりと定めたということであり、語弊を恐れずに言えば、ある意味で、その後の彼の文学的営為はそれに対する綿密にして深甚なる注釈の作業という趣きを呈する、と云っても過言ではない。このことを言葉をかえて、「ネルヴァルが1840年、ウィーンから帰ってきて、『ファウスト第二部』の翻案を仕上げたとき、決定的な段階が飛び越えられた。」⁽⁴²⁾と言ってもいい。少くとも、「1828年の序文」と「1840年の序文」とを比較検討したものにとって、そのことは異論の余地を残さない事実として映じる。これについては次節において触れることにして、今は『ファウスト第二部』の訳業をめぐるいくつかの事情とその実態を、しばらく追うことにしよう。

ゲーテの死後、1833年に『ファウスト第二部』がその全体的な形で初めて世に現われるに先立ち、後にその「第三幕」となるいわゆる「ヘーレナ挿話」が既に独立して1827年に出版されていたことは周知の事柄である。フランスにおいてもその翌年には、当時ゲーテの秀れた紹介者として令名の高かった J.-J. Ampère によって立派な分析が雑誌に発表されていた。⁽⁴³⁾また、第二部全体が出版されてからも、いくつかの秀れた論文が書かれているから、ネルヴァルがその翻訳に着手した1839年には、それに対する解釈・評価のある種の煮つまりが既に存在していたことは確かであろう。しかしいづれにしても、『第二部』の驚くべき壮大な姿は、一般にきわめて異様なものとして映ったらしい。それでも、正統的な秀れたゲルマニストであり、後にネルヴァルと『第二部』翻訳で競合することになる Henri Blaze de Bury などは、当初から、『第二部』の重大さを認めていた。「文体の偉大さと思考の豊饒さの点で、『ファウスト』の「第二部」は私には「第一部」よりはるかに優っているように思われる。そこでは、ゲーテその人だけが君臨し、自己の意志に従って自己の空想の主題を領導していく。自然と人間の生命との諸現象を観察することが、熱い心情の吐露に取ってかわっているのである。」⁽⁴⁴⁾取り立てて瞠目すべき見解とも言えないが、

これがひとつの冷静な、従ってある意味では面白みのない解釈を導く姿勢の一端であるとは言えよう。⁽⁴⁵⁾

ネルヴァルも『第二部』を前にしてひどく当惑したらしいことは、次のような評言に見てとれる。「この作者死後の補遺は、全集の一部としてのみ出版されたのであるが、この作品は第一部の明解で簡明な展開とは直接のつながりをもってはいず、その詩情と、詳細な観念の偉大さがいかにあれ、それらはあの『ファウスト』を不滅の作品たらしめた、調和に満ちそして端正な全体を、もはや形づくってはいないのである。⁽⁴⁶⁾」この意見は常識的であるが、そこには必ずしも不当とはいえない部分も見られる。しかし、これは『ファウスト』全篇に貫かれた本質的なテーマに対する、はっきりした無理解に外ならない。同様に次の一節、「実際、『ファウスト第二部』の発想は、なるほど『第一部』のそれよりはるかに高遠であるかもしれないが、必ずしもそれと同じ程に完成された好ましい形を見出しているとはいいがたいし、たとえこの作品が哲学的分析にひとしお訴えかけるものをもっているにしても、大衆性を得ることは今後ずっとないだろうと考えてさしつかえない。」⁽⁴⁷⁾この言葉にはネルヴァルの『第一部』に対する、とりわけ「グレートヒェン悲劇」に対するノスタルジーが垣間見られて興味深いが、それ以上に、彼の当惑と、その当惑を払いのけるかのよう⁽⁴⁷⁾に試みた特殊な部分訳のための事前の弁明と受けとることも可能である。このような姿勢は最終的には次のようなはっきりした弁解となって表明される。

「ゲーテのこの二部にわたる詩作品の解説を締めくくるにあたって、それをたぶん人の望む全幅の明晰さで広く おおうことができなかつたのは遺憾である。作者の思考はしばしばわざとのように抽象的で不明瞭であり、そこで勢い、意味内容よりもむしろ解釈を与えざるを得なくなる。この大きな欠点のゆえにこそ、とりわけフランスの読者のためには、『新ファウスト』のうち、いくつかの付属的な部分⁽⁴⁸⁾を梗概によって代替せざるをえなかつたのである。」読者のためであるよりは自らのためであるに外なるまい。哲学的と称される部分に彼の理解が行き届かなかつたのではない。彼が意図的に選択して訳出した部分の外は、彼の内面的関心に訴えかけるものがなかつたにすぎず、明晰なるフ

ランスの読者というのは、体のよい口実でしかない。「1828年の序文」であれほどに非難した Sainte-Aulaire のやり口を、まるでそんなあげつらいをしたことなどないかのように、今度は逆に趣味の良い態度と評するに至っては身勝手というものだろう。そして、翻訳を明瞭なものたらしめるには、訳者の操作がなされてしかるべきだとして、その点に関するゲーテの『詩と真実』の一節を引用する。しかし、これはゲーテがヴィーラントのシェイクスピアのドイツ語訳を論じて、詩作品の散文化の意義を説いているにすぎない個所なのであるから、援用するには場違いであろう。それにしても、そのような強弁が彼の沸き立った内面的要請によってなされていることを思うとき、それは却って痛切な印象として迫ってくることは否めない。

ところで、『第二部』の翻訳出版をめぐる、先に触れた正統的ゲルマニスト Henri Blaze de Bury 及びその出版社と、ネルヴァルの側との間に競合関係が出来たことが知られている。⁽⁴⁹⁾ 相手方出版社から、ネルヴァル側によって仏訳題名が盗用されたという非難がなされ、事が泥仕合の様相を呈するに致ったため、その文学的ならざる紛糾を解決すべくネルヴァルが発表した一通の公開書簡は、彼の弁明のある意味で苦しい側面を伝えて興味深い。「『ファウスト二篇』 Deux Faust という書名は、シャルパンチエ書店のものではなく、万人のもです。なぜなら現に、ゲーテの『ファウスト』はふたつあるのだし、それ以外に題のつけようはないのですから。」一種の居直りである。「シャルパンチエ氏は 当方の出版の信用失墜を狙うべく、新聞諸誌に 広告をのせましたが、これは、(氏の表現のひとつをここで用いるなら)《良い趣味》でありましようか。その中で、当方の訳本には『ファウスト第二部』の三つの場面しか入っていないなどと広言していますが、それは飛んでもない話で、拙訳には、作者存命中の1828年に現われた『ファウスト第二部』全篇が完訳で含まれているのであります(……)。確かにその後、作品は増補されてはおります。しかし私はそれに加うるに、その補遺のうちの主要な六つの場面を訳出し、併せてそれらに序文と甚だ長文の要約を付すことで、説明を加え、まとめ上げているのです。全体ではざっくり詰めて118ページになるわけで、併載の旧『ファウ

スト』(第三版)はそのうち157ページにすぎません。⁽⁵¹⁾このような弁明も今日の客観的な眼から見れば、やはり一種の強弁であることは確かだが、慌しいジャーナリズムを生活の場としたネルヴァルのある種のしたたかな側面を覗かせていて、別種の興味をそそられる。そして公開書簡は、あたかも敵に塩を送るという風情で締めくくられる。「私は、学識才能に満ちた若き詩人であるブラーズ氏も、このようなまったく商業上の口論には同じように当惑なさっているものと承知しております。氏は私が散文ではとても満足な翻訳はできないと絶望した、死後発表された『ファウスト』の、曖昧な、と言うより取るに足りないあるいくつかの場面に価値を与えようとして、氏自身の韻文の魅力を当てになさったものに違いありません。それらをすっきりと切りつめるという私の行使した権利を、よもや氏は否定なさらないでしょう。そうした権利は、『ファウスト』よりはるかに有名な作品を前にして、セヴランジュ氏やサントーレル氏やロエーヴ・ヴェマール氏や、その他第一級の翻訳家たちのしばしば行使したものであり、彼らには、削除を施さずにフランスの読者の趣味を満足させることのできる外国の作品は殆どない、ということがわかっているのであります。⁽⁵²⁾しかし変われば変わるものだというのが率直な感想ではあるまいか。言葉の端々にちらりと棘を含んだあたりは、彼にも Bon Gérard ばかりではない血気にはやった時代があったのだということを示している。ここで注意すべき一節は、彼が「死後発表された『ファウスト』の曖昧な、と言うより取るに足りないあるいくつかの場面」(certaines scènes obscures ou faibles du Faust posthume)と甚だ断定的な口吻を弄している個所である。これは恐らく戦略的な言辭に違いない。彼には自分の選択訳出した部分が『ファウスト第二部』の本質的な部分なのだということを強調する必要がある、このような機会であるからこそなおさら、ある種の曲論をも辞さなかったのであろう。

まさしく、訳出された『ファウスト第二部』は、一見するだに風変りな姿をしている。翻訳として、これほど冒険的な試みも例が少いのではあるまいか。それは、全五幕のうち第三幕のいわゆる「ヘーレナ挿話」のみを忠実に全訳し、その前後を部分訳と解説的要約でつないでゆくという、思いきった構成を

とっている⁽⁵³⁾。その工夫によって『ファウスト』劇が明瞭化されたと考えるのは、ネルヴァルの立場である。だがそれではゲーテが矮小化される、と考えるのもひとつの態度である。ただ、少くとも古典的均整を美的規準とする当時のフランス人読者に対しては、そのやり方が親切であったことは確かであり、ましてや、彼にとっては、それ以外の方法を探りえないところの、必須の内面的要請に外ならなかったのである。

さてここで、ネルヴァルの具体的な翻訳ぶりをしばらく見ていくことにしよう。『第一部』の翻訳から12年を閲した今、ドイツ語の語法に関する彼の能力が相当の進歩を遂げていることは、容易に想像されよう。実際、その訳文の詩的格調は、以前のある意味では姑息とも思われる、部分的な定型詩化をいさぎよく放棄した結果、却って内的律動の獲得に成功している。それはあたかも、後年シャルル・ボードレールによって語られるあの «le miracle d'une prose poétique, musicale sans rythme et sans rime, assez souple et assez heurtée pour s'adapter aux mouvements lyriques de l'âme, aux ondulations de la rêverie, aux soubresauts de la conscience»⁽⁵⁴⁾の部分的実現に外ならない、と評価することも可能である。しかしそれにもかかわらず、彼の翻訳態度が総じて、自己の思考を託するに足る重要な部分と判断される所では、ためらいなく散文によって意を尽そうとし、それに対して、別の比較的叙情性の優れた所では、無押韻ながらも詩形式への未練を断ち切っていないというように、いくぶん動揺しているせいで、必ずしも成功しているとは言い難い訳文が散見される。

まず、成功しているとは評価しがたいひとつの例を挙げよう。『第二部』冒頭、優美な地方に、疲労しぎって横たわるファウストに降りそそぐ、名高い「アーリエルの歌」、

«Wenn der Blüten Frühlingsregen
Über alle schwebend sinkt,
Wenn der Felder grüner Segen

Allen Erdgebornen blinkt,
Kleiner Elfen Geistergröße
Eilet, wo sie helfen kann,
Ob er heilig, ob er böse,
Jammert sie der Unglücksman.

(4613-4620)

この揚抑（強弱）の調子で、まさに上から下へと降下する軽快なリズムは、自然の治癒力を象徴すアーリエルたちの歌にまことにふさわしいが、ネルヴェール訳ではこうである。

«Si pluie des fleurs du printemps
Tombe en flottant sur toutes choses;
Si la bénédiction des vertes prairies
Sourit à tous les fils de la terre,
Le grand esprit des petits Elfes
Porte son aide partout où il peut;
Et que ce soit un saint ou méchant;
L'homme de malheur excite toujours sa pitié.»⁽⁵⁵⁾

そもそもストレス・アクセントを持たないフランス語に、ドイツ語原詩のリズム感を期待するのは、無いものねだりに似るとしても、このぎくしゃくとして滞りがちなフランス語がまるで音読に堪えないのは明らかであり、ある評者の断言するとき「*incontestable poésie*」⁽⁵⁸⁾に浸されているとも思えない。ここで、*wenn* が「時」を表わしていることは明らかであるが、フランス語の対応語 *si* をその意味に用いるのは、可能であるにしても少々無理な擬古趣味と云うべきであろう。

同様に、数は少いが、やはり次のような例。心慰むアーリエルたちの歌は、

恐しい大きな音とともに一変し、激しくたたみかける。

«Horchet! horcht dem Sturm der Horen!

Tönend wird für Geistesohren

Schon der neue Tag geboren.

(……)»

(4666-4669)

«Ecoutez, écoutez. La tempête des Heures

Résonne déjà pour les oreilles des esprits;

Déjà le nouveau jour est né.⁽⁵⁷⁾»

原詩の緊迫感に満ちて調子高く一気に走る勢いが、奇妙な手続きによって裁断され組みかえられ、特に仏訳の二行目では音調が一度降下せざるをえないから、ある種の間延びは避けがたいだろう。

しかし、このような部分は畢竟、瑕瑾にすぎない。訳文の巧拙は彼の関心の深浅に左右されている節があり、次のような例はひとつの秀れた訳文と評価することができる。先の激しい「アーリエルの歌」を受けて、ファウストの発する独白、

«Des Lebens Pulse schlagen frisch lebendig,

Ätherische Dämmerung milde zu begrüßen;

Du, Erde, warst auch diese Nacht beständig

Und atmest neu erquickt zu meinen Füßen,

Beginnest schon, mit Lust mich zu umgeben,

Du regst und rührst ein kräftiges Beschließen,

Zum höchsten Dasein immerfort zu streben.->

(4679-4685)

このテルツィーネ (Terzine) で鎖状に連続と続いてゆく独白は、本来どこかで切断することを不可能にしているが、まことにこの場合ふさわしい形式と
 言えよう。⁽⁵⁸⁾ネルヴァルはここでは訳文を突然散文に変更する。この終るとも知れない独白は、却って次のような自由な散文訳によって、その内部の精神的リズムを移すことに成功していると言えよう。

«Les pulsations de la vie battent avec une nouvelle ardeur, pour faire un riant accueil au crépuscule éthéré. Et toi, terre, tu dormais aussi cette nuit, et tu respirez à mes pieds, nouvellement rafraîchie. Tu commences déjà à m'environner de délices, tu animes et encourages ma forte résolution d'aspirer désormais à l'Être-Suprême.»⁽⁵⁹⁾

以下、原詩に劣らぬ内的密度をもって訳文は続いてゆく。ゲーテの詩心とネルヴァルのそれは、このような場合にこそ幸福な融合を遂げるのである。ただここで、ネルヴァルの訳文に見られる看過しがたい、本質的な点に係わる《誤訳》に注目しよう。immerfort が désormais となっているのも結局はそのせいであろうが、あの『ファウスト』における重要な動詞 streben をここでも aspirer としているのは、いわゆる《Das Leitmotiv des Strebens》に対する顧慮を、12年後に至ってもなお欠いているということを示している。すなわち、aspirer という「高み」を一気にめざす語の使用によって、人間の営為の過程を重要視する思考が、すっぱり落ちてしまっているのである。それは、この『第二部』翻訳が忽卒の間に成されたという外的事情⁽⁶⁰⁾などによるのではない。それはネルヴァルの精神の型がどのようなものであるかを明瞭に示す、重要な手がかりのひとつに外ならないのである。

「第一幕」において、この「優美な地方」と並んで全訳の対象となったのは、注の対照表に示したごとく、「暗い廊下」と「騎士の広間」の条りである。「皇帝の宮城」全体を大急ぎで要約してきたネルヴァルは、こう付言する。「これらすべての挿話的場面では、ファウストは殆ど忘れられている。次の場面

ネルヴァルの『ファウスト』解釈

に至って、彼は、あの『第一部』の意欲と行動性と詩的渴望 (ses poétiques aspirations) とともに再び登場してくる。それゆえに、この場面は全体を示すことにしよう⁽⁸¹⁾この言葉は、ネルヴァルが『第一部』と『第二部』の内的連関を、ファウストの人物像において把握していることを示しているが、そこでファウストの劇的屬性を、「意欲と行動性と詩的渴望」としているのは興味深い。又しても、aspiration である。この言葉は殆ど彼の精神の通奏低音の観を呈する。さて、こうして導かれる「暗い廊下」には、われわれの関心を惹くに足る重要な一節が見られる。皇帝の所望に応じて、ヘーレナとパリスを現し世へ連れ出す役目を引き受けたファウストが、メフィストに手助けを強要するこの興味深い場面で、ネルヴァルの特殊な関心を惹きつけたのは、彼の精神の奥深い所を規定している、あの「母のテーマ」であることは確かである。そのことを、彼の訳文はなによりもはっきり示している。

«Mephistopheles:

Ungern entdeck' ich höheres Geheimnis.
Göttinnen thronen hehr in Einsamkeit,
Um sie kein Ort, noch weniger eine Zeit;
Von ihnen sprechen ist Verlegenheit.
Die Mütter sind es!

Faust, aufgeschreckt:

Mütter!

Mephistopheles: Schaudert's dich?

Faust: Die Mütter! Mütter! -'s klingt so wunderbar!»

(6212—6219)

« Méphistophélès.

Je te découvre à regret un des plus grands mystères. Il est des déesses puissantes, qui trônent dans la solitude. Autour d'elles ni

lieu, ni moins encore le temps. L'on se sent ^(sic)ému rien que de parler d'elles. Ce sont LES MÈRES.

Faust (*effrayé*).

Les Mères!

Méphistophélès.

Ce mot t'épouvante?

Faust.

Les Mères! les Mères! Cela résonne d'une façon si étrange!⁽⁶²⁾»

極度の思い入れによって調子高く訳出されたこのフランス文は、それ自体として見れば、緊張を孕んだ美しい訳文だと言えよう。しかし少し注意深く原詩と対比してみると、ここにもやはり、ネルヴァル独特のひねりが存在しており、それはもはや、原作を美しく裏切るなどという段階を越えて、ひとつの創作と化していることがわかる。先ず気付く点は、hehr という副調が puissant という形容詞に転換されて、「女神」を修飾することになった結果、君臨の状態を表わしていたものが「女神」の属性を示すものに変質している点である。それ自体は場合によって許されうるとしても、hehr は決して puissant と質を同じくしないことは確かであるうえ、それが新たに «déesses puissantes» というひとつのまとまりを創り出したために、ネルヴァルの精神の深層の特殊な願望がみごとに表面化されていると言えはしないであろうか。その深層願望が勢いを得て意識の表面に浮上してきたとき、「Von ihnen sprechen ist Verlegenheit.» を訳して、「L'on se sent ^(sic)ému rien que de parler d'elles.» という殆どでっちあげに類した訳文を作り出してしまうのは必然的と言うべきであろう。そして、この部分の台詞がすべてメフィストのものであることを思い出して、われわれは驚きを新たにする。ネルヴァルは、もはやそれが誰の発する言葉であるかなどということに何の関心も払わず、ひたすら「母」という、彼にとって崇高な言葉を響かせることだけに腐心しているのである。

このような、彼に個有の心理的プリズムによって一度屈折せしめられた解釈

の偏差は、次第にその値を増大させ、そのまま首尾の一貫性を保とうと若心する結果、全体は明らかにネルヴァルの『ファウスト』に変身する。次のようなまことにこなれた訳文の、一体どこが非難できよう。

«Je ne cherche point à m'aider de l'indifférence; la meilleure partie de l'homme est ce qui tressaille et vibre en lui. Si cher que le monde lui vende le droit de sentir, il a besoin de s'émouvoir et de sentir profondément l'immensité (sic).»⁽⁸³⁾

しかし、これを原詩と比較したとき、微妙な質の相違が感ぜられはしないであろうか。

«FAUST. Doch im Erstarren such' ich nicht mein Heil,
Das Schaudern ist der Menschheit bestes Teil;
Wie auch die Welt ihm das Gefühl verteure,
Ergriffen, fühlt er tief das Ungeheure.»
(6271—6274)

特に原詩の後二行が、人間存在の孕む本質的意義の決然たる表明に外ならないのに対して、ネルヴァル訳においては、許されざるものをせつなく求めるといふ趣きを呈している。ましてや、「das Ungeheure」をフランス語の *immensité* で置き換えることによって、意識がひたすら「彼方」を希求する、という印象を与えることは避けがたく、実際ネルヴァルはそのような思いをこめつつ、その言葉をイタリック形によって強調したのであろう。

翻訳形態の特殊性は、こうしてその訳文の特殊性と相俟ち、訳出された『ファウスト第二部』は全体として、ネルヴァルの世界の内的構図を、まことにくっきりと浮き彫りにしている。それはまさしく、彼の関心の積極的表明であって、その個有の思考は訳書に付された「1840年の序文」において、いっそう明

瞭に展開されている。

5. 「1840年の序文」——母たちの国へ

『ファウスト』第一部・第二部の総括的解説として書かれた「1840年の序文」は、そこに展開される思考の独特の密度から判断して、相当程度の発酵期間を経ていることは明らかであろう。それは決して『第二部』訳出のさなかに突然天啓のごとくに閃いたものではない。作品との長い対話と、実人生における心理的危機との争闘なくして、あのように独特に歪んだ「ファウスト解釈」は成立しない。「1828年の序文」においては、あれほどスタール夫人に依存し、殆ど独創性を顧慮しないまでに、夫人の解釈を踏襲するばかりであったネルヴァルは、ここにおいては他者の解釈を取捨選択しつつ敷衍するなどという、正統的ではあるが姑息な配慮を一切抛擲し、ひたすら、自らの内面の高潮感のみを吐露し続ける。まさに、ゲーテの『ファウスト』はネルヴァルの思考に、ひとつの表現のきっかけと場を提供し、そこでの思考は、彼の文学の本質的部分を生涯にわたって支配してゆくのである。

「解説」にふさわしく、初めネルヴァルはごく常識的に、ゲーテに先行する諸種の『ファウスト』劇に言及することから始める。そしてそれらの中で、もっとも注目に値いするものは、イギリスの詩人マーロウ (Marlowe) によって十六世紀に書かれたものであり、時代を超えて意義をもつ、その善と悪との争闘劇という性格に注目する。主題において、マーロウとゲーテとの各々の『ファウスト』には共通性なしとしないが、その思考の展開には注目すべき相違が見られ、その対比にこそゲーテの独創性は見られるのだとする。「一方においては、宗教改革の誕生を知らせる思想の動きが感取され、他方においては、それにひき続いて起り、次いでそれを後方に置き去りにしたところの、宗教的哲学的反動が感取される⁽⁸⁴⁾」のである。マーロウにおいては、劇中の思考はすべて、護るにせよ攻撃するにせよ、キリスト教の宗教世界をめぐって展開されて

いるが、ゲーテの置かれた精神的状況は、言わばある種の出尽した時代の苦悩と称すべきものであり、そこではもはや、宗教上、哲学上の有り得べき解答が争闘を重ねつつもすべて出そろい、事態は「選択」の問題でしかなくなっている。このような把握の仕方には、ネルヴァルがゲーテその人を世代の懸隔を超えた自らの同時代人、と意識していたことが見て取れる。後年、自らの青春時代が過ぎた1830年代を回想して述べた、次のような言葉には、『ファウスト』と対話を重ねていた時代の彼の、精神的風土が適確に述べられている。

《その頃私たちは、ふつう革命のあとや、偉大な治世の衰微のあとにやってくる一種異様な時代に生きていた。もはや、フロンドの乱の頃の雄々しい色事も、摂政時代の優雅に飾りたてた淫蕩の生活も、総裁政府の頃の懐疑主義と狂気にみちた大饗宴も、昔がたりになっていた。それは、活気、躊躇と怠惰、輝しい理想境への夢想、哲学的または宗教的な憧憬、本来の自己の再生へのある種の本能的な予感が交ったとりとめもない熱狂、そういったものが一つに混り合って、なにかしらペレグリヌスやアプレイウスの頃を思わせる時代だったのである。》⁽⁸⁵⁾

とりわけ後半の文言には、彼がゲーテの『ファウスト』を言わば教導の書にも似た読み方をしたに違いないと推測させるものがある。そのような出尽した時代にあって、ゲーテはまさに調停者として現われたのだとネルヴァルは考える。

《われわれにおいては最終的に ヴォルテールによって、またイギリス人においてはバイロンによって、明確に表現された宗教の否定は、ゲーテにおいて、その敵対者というよりむしろ、調停者を見出したのである。この詩人はその諸作品において、彼の国の哲学の諸々の発展、あるいは少なくともその最終的な変容を追いつつ、それら敵対する諸々の主義に、受け容れないこともできるが、しかしその学識に基づいた完璧な論理を否定することは不可能

な、ひとつの完全な解決を与えたのである。》

その《une solution complète》とは何か。それこそが、ネルヴァルの動揺する宗教的感情にひとつの形を与えたものであり、又彼にとって、ゲーテの哲学と宇宙観の奥底に横たわる本質として把握されたものに外ならない。それは、今日では当然のように受け取られているにすぎないが、いわゆるゲーテの「汎神論」と呼ばれているものである。ネルヴァルによれば、ゲーテの与えた解決とは、折衷論でもなければ融合論でもない。

《(……) 古代と中世とが混りり合うことなく手を取り合い、物質と精神とが和解し、感服しあう。失墜したものが起き上がり、歪められたものが身を立て直す。悪の原理自体が普遍的愛の中に溶け込む。それは、近代の汎神論である。すなわち、神はものみなすべてに宿り給うのだ。》

このように、ネルヴァルによって、『ファウスト』全篇、とりわけ『第二部』を統べる根本観念でもあり、又その最終的結論でもあると解釈抽出された「汎神論」という思考形態は、当然十八世紀ヨーロッパの伏流的思潮のひとつに外ならないが、ネルヴァルの動揺し引き裂かれた意識には、それこそがもっとも抱括的にして慰めに満ち、又、時間と究間の虚無的な力に抗しうる唯一の原理と映ったのである。そして、一度そのように意識された「汎神論」的思考は、彼の精神の方向を決定し、その興奮によって増幅されつつ、『ファウスト』の解釈の性質を規定してゆく。ネルヴァルにとって『ファウスト』は、「汎神論」を体現することによって、あのカトリック的思考の体現化に外ならないダンテの『神曲』と唯一拮抗しうる、近代の「詩篇」なのである。

こうして、当然のこととはいえ、ネルヴァルの解釈は、ゲーテその人の思考を追うことをやめ、さながら《confession de foi》にも似た趣きで、彼にとって重要性をもつ場面をひたすら追い始めるのである。彼は、ゲーテの汎神論が最も鮮やかに表現されている部分として、あの「第三幕」の、オイフォリオン

を喪ったヘーレナが、ファウストの腕の中に着物とヴェールを残して、自らも黄泉へ降る場面を挙げる。そこで彼の関心をもっとも惹きつけたのは、パンタリスとその他の女中たちの間に見られる運命の相違である。

「それまでは、夫妻のまわりにおいて、存在の形を取り戻していた幻の者たちが、今度は消失して、今まで彼女たちのかりそめの受肉に奉仕していた様々な原素を、自然に返してしまう。」

「ゲーテの汎神論の体系がこの条りにおいて再び表現されているのだ。彼は一方では、物質によるもろもろの姿かたちを、一般的総体に送り返してしまうが、それでいて、不滅の霊的存在の個性性は承認するのである。見られるごとく、ただ、選ばれたる霊のみが、混乱と虚無を逸れるに必要な「凝集力」を持っている、とゲーテには思われる。ヘーレナはその著名さと魅惑の故に、個性性を保持することができる一方、パンタリスはその忠実さと愛との力によって、ただひとり救われるものとなる。他の、物質の磁気力によって生じた空しい生命体は、一種の、思考能力を欠いた総体的活力を失わないまま、風にざわめき、閃光にきらめき、茂みに呻吟し、人に幻の観念と狂的夢想を創り出すあの新しい酒の中で楽しげに泡立つのである。」

この奇妙な解釈は、明らかに通常のそれとは異なっている。ネルヴァルは、エッカーマンによって伝えられるゲーテのあの「エンテレヒー」論⁽⁸⁸⁾は承知していなかったし、たとえ承知していても、自らの解釈を翻しはしなかったであろう。彼は、この個所を指摘することによって、生命の一般的不死性を主張しようとしているのではなく、パンタリスの毅然として言い放つ、

«Wer keinen Namen sich erwarb noch Edles will,
Gehört den Elementaren an; so fahret hin !
Mit meiner Königin zu sein, verlangt mich heiß;
Nicht nur Verdienst, auch Treue wahrt uns die Person.»

(9981-9984)

という言葉に与して、個別的人格の不死性に執着しているのだからである。彼はこの個所を次のように訳して、その深い関心を如実に示している。

«Celui qui ne s'est acquis aucun nom,
Qui n'aspire vers rien de noble,
Appartient aux éléments; aussi passez, passez !
Je désire ardemment être seule avec ma reine;
Non seulement le mérite, mais la fidélité
Nous conserve notre existence.»⁽⁶⁷⁾

原詩の内容は訳文において明白に増幅されている（因みに又しても aspirer である）。ここで注目されるのは、一般に《die persönliche Fortdauer》の意である⁽⁶⁸⁾《die Person》という語に、《existence》という訳語をあてている点であって、そこでは「永続性」より「現に今どこかに在る」という、早や秘教的思考の刻印が見られるのである。

従って、彼が「靈魂の不滅性」に関するゲーテの思考に注目するのは当然であっても、その把握の仕方には、既にしてきわめてネルヴァルの思考の展開が見られる。彼は、ゲーテのそれに、ライプニッツの单子論とスウェーデンボルクの磁気説の影響が混在して認められると指摘してから、こう述べる。

«宗教がわれわれに教えるごとく、人間存在が分解した後もなお、不滅の部分が生き残る、ということがもし真実であり、又、もしそれが、自らを独立的な他と違ったものとして保ち、普遍的魂の胸ふところに融け込んでしまうなどということがないならば、無辺際（immensité—筆者注）の中には、それらの魂が、他の魂のまなざしはおろか、夢や催眠術や苦行的瞑想によって一瞬だけしか、この地上の絆を脱け出ることのできない魂のまなざしにさえも、知覚できる姿を保っているような、そういう地域や天体が存在しているに違いない。」

この明瞭に occultisme 的思考は、以後執拗に彼の精神を支配しつづけ、死の年の作品『オーレリア』の次のような一節にも影を落している。

«ぼくたちは不死であり、かつて住んでいた世界の 影像をぼくたちがここに守っているというのは、やはり本当なんだ。ぼくたちの愛したものすべてが、たえず身边に存在すると考えられるなんて、何としあわせなことだろう。ぼくは人生にすっかり疲れ果てていたんだ！」

(……)

「虚無というものは、普通考えられているような意味では存在しない。だが、大地それ自体は物質的な肉体であり、そこに生きる精神の総和が大地の靈魂なのだ。物質も精神もともに滅ぶことはありえないが、物質は善悪に応じて変容しうるものだ。われわれの過去と未来とは互いにかたく結ばれている。私たちはわれわれの一族のなかに生きており、われわれの一族は私たちの中に生きているのだ」(第一部四章)

こうした思考に達する前のこの段階で、ネルヴァルの精神を衝き動かしていたのは次のような、「一切の虚無化」に対する恐れである。

«限界のある深淵に降っていく、ダンテの地獄の圏円の彼方に、あらゆる天球を抱摂する、彼のカトリック的天国の壮麗な地域の彼方に、なお、神のまなこにさえその果てを知覚することのできない空無が、遠い遠いところにあるのだ。」

カトリックの整合的世界観が破綻したという認識がここに見られると同時に、一般に神の創造行為全体がその虚無の中に拡散してゆくという、あたかもパスカルの実存意識の近代的形態とでも称すべき認識が、ここに表白されている。このような認識に立ってネルヴァルは、『ファウスト』におけるゲーテを、その「ぽっかりと口を開いた無限」の恐怖を、「至高の靈的存在の不滅性」と

いう観念によって克服してゆく、秀れた先達に外ならないと評価するのである。『ファウスト』の詩人にとっても、又恐らくは神にとっても、と彼は思考を展開してゆく、変わるのはただ「物質」(matière) にすぎず、そして、過ぎ去ったすべての時代は、「靈的存在や亡霊の形で」物質界の周囲に幾重にも同心円的に広がっているのである。このような世界こそ、まさに、ネルヴァルの思考に投影された「母たちの国」である。

《そこでは、それらの幽霊たちが、かつて生命の太陽によって照らされた諸々の行為を、今もなお仕遂げつつあり、あるいは仕遂げることを夢見ている。その行為においてこそ、あの靈的存在や亡霊たちは、⁽⁶⁹⁾その不滅の魂の個別性を証明しているのだ。》

これらの殆ど悲痛な夢想にも似た解釈は、まぎれもなく秘教的思考に染められている。それは例えば、エッカーマンがゲーテに激励されて行った「母たちの国」⁽⁷⁰⁾の解釈(1830年1月10日の項)の、いわゆる《Urbilder alles Lebens》論と比べると、一層明らかである。ネルヴァルにとって、「靈的存在」は呼び出されて、かりそめの受肉を得るという存在ではなく、無辺際⁽⁷¹⁾のいずこかに個別性を保ちつつ、今現に在るものたち、のことである。従って、「母たちの国」は文字どおり、母たちの住まう国に外ならず、そこにこそ、彼の解釈の特異さがある。それは後に『オーレリア』において、諸教混淆的な救済の女神としての、イシスの姿に凝縮されてゆく。

この秘教的思考はまことに鮮やかにネルヴァルの精神を特徴づけるものであって、魂の不滅性の観念は、こうして次のような言葉を、彼につぶやかせる。

《靈的な存在 (intelligence) に深く刻印を打ったものは、なにひとつとして滅し去りはしないのだ、そして、永遠はその胸ふところに、魂の眼によって見るのできる一種の全体的歴史、つまり神的同時性のようなものを保持して、それがいつの日にかわれわれを、全未来と全過去とをひと目で

ネルヴァルの『ファウスト』解釈

見渡してしまう者の知恵に与らせてくれるかもしれない、そう考えることは慰めになるだろう。」

人間存在を根底的に束縛する、時間と空間の桎梏に対する、これは完全な挑戦である。それは殆ど狂的であって、しかもなお慰藉に満ちている。ゲーテの壮大な思索は、こうしてネルヴァルの精神の個有の部分に深く作用して、その独自の探索へと彼を駆り立てていくのである。

ネルヴァルは『第二部』のうち、第三幕の「ヘーレナ挿話」だけを全訳した、ということは前に触れたが、その崇高な物語のうちで彼の思考にもっとも深く作用したのは、そこに見られる時間感覚の独創性である。彼において、時間の領略の要請は、後半生の切迫した課題であったが、その核心的な思考は彼の「ヘーレナ挿話」解釈において、既に明瞭な形態をとっている。

ファウストの願望によって冥界ハデスから引き戻されたヘーレナは、第三幕の冒頭において、陥落したトロイをメネラスの手によって脱け出し、スパルタへ連れ戻されるわけだが、その最初の瞬間から早や、かつての侍女たちに迎えられることに、ネルヴァルは特別の関心を払う。彼は「ヘーレナ物語」の劇的アナクロニスムなどに、文学技法上の感銘を受けているのではなく、そこに展開される時間性を、夢における時間感覚と同質的なものと考えているのである。

《ここに今、「現在化」されているのは思い出なのであろうか。それとも、一度過ぎ去ってしまった同一の出来事が、同一の細部をもって再生されているのであろうか。それは、夢のあの空恐しい幻覚のひとつ、いやそれどころか、ひとが既にしてしまった行為を再び行ない、既に言ってしまったことを再び言い、それに応じて、これから起ろうとする事柄を予見してしまうような、そういう人生のある瞬間のひとつでさえあるのだ。(……)》

《一世紀の円環が今再び開始され、行為は定着され、明確化される。だが

ヘーレナは上陸以来、時間を夢の急速さをもって飛び越えてゆく。陳腐ではあるが、その奇妙な進展を完全に表現してくれる例えを用いるなら、それはまるで、永遠の時計が見えざる指によって遅らされ、ずっと以前に過ぎ去ってしまったある日に再び合わされ、まるでチェーンの切れた仕掛けのように狂っていき、次いで、たぶん毎時間ごとに一世紀を示していくように思われるのだ。》

ネルヴァルはここではまだ後年におけるほど確信的ではないが、夢の時間性の特殊な力に多大の注意を払っていることは明白であろう。彼は「ヘーレナ物語」に展開される3000年にわたる時間の流れを、夢の時間の凝集性に読みかえているのである。「現実の一世紀を夢の一分間に凝縮させるというあの時間的現象にも似た空間的現象によって」⁽⁷¹⁾という『オーレリア』の一節は、その起源をこのような解釈のうちに既にもっている。

《二、三分の麻痺のあと一つの新しい人生がはじまるのだ。それは時間と空間の諸条件から解き放たれ、おそらく死後われわれを待っているあの世に似ている。》⁽⁷²⁾

『オーレリア』のこの確信的な言葉に至るまで、彼の精神は幾度も激しく痙攣することになる。こうして、「ファウスト」のネルヴァルの解釈の重要なふたつの点、すなわちその「汎神論」と「夢の時間の凝集力」とが幾分明らかになった。

ここで、彼が「第二幕」と「第三幕」との間の書かれざる部分に、注意深く言及していることに眼を向けるべきだろう。すなわち、ゲーテが本来書く意図を持ちながら、ついに実現されなかった、ファウストの「冥界下り」のテーマを、ネルヴァルは指摘することを忘れないのである。

《今度はもはや、皇帝や宮廷を楽ませるために、ふたつの亡霊を深淵か

ら引き出すことが問題なのではない。それはもはや空間と諸世紀をこっそり渡っていくのではない。古代の世界にしっかり足を踏まえにいき、しばしその生命に参入し、そこからヘーレナの亡霊を奪い取って、われわれの空気の中で彼女を物質的に生きさせねばならないのだ。それは殆どオルフェの冥界下りであるだろう。」

この若干焦点のぼけた表現のなかで、彼の用いた「オルフェの冥界下り」という言葉は、この段階ではまだ、それが後に彼にとってどれほど痛切な意味を担うに至るか気づかぬまま、使用されている節がある。『オーレリア』第二部の性格をきわめて象徴的に語っているあの「エウリュディケー！エウリュディケー！」というエピグラフと遠く響鳴しあう、この着目は、彼におけるひとつの潜在的予感であったのかもしれない。「冥界下り」のテーマがもしこの時期において既に、彼の精神の内部でじゅうぶんな発酵を経ていたのであるならば「古典的ワルプルギスの夜」におけるマントーのこの言葉、

«Tritt ein, Verwagner, sollst dich freuen!
Der dunkle Gang führt zu Persephoneien.
In des Olympus hohlem Fuß
Lauscht sie geheim verbotnem Gruß.
Hier hab' ich einst den Orpheus eingeschwärzt;
Benutz es besser! frisch! beherzt!»

(7489-7494)

を、訳書においてあれほど粗略に扱いはしなかつただろう。彼はこの部分を素気無く要約して通り過ぎてしまう。自からがオルフェと化して、彼のエウリュディケーをもとめる冥界下りの旅に出ることになろうなどとは、彼にはまだ意識されていない。

ネルヴェルの『ファウスト』解釈が訳文と「序文」の相方において、深く彼個有の内面的関心によって、言わば独特にねじれていることは、こうして明らかになったが、それが後年の『オーレリア』という「試練の書」のあたかも自注の趣きを呈していることは、われわれの関心をまことに強く惹きつける。この作品においてもっとも核心的な一節は周知のとうり、諸教混淆的な女神として造形されたあのイシスの言葉であろう。

«「私は聖母マリアそのひとであり、おまえの母親と同じひとであり、また、おまえがたえず愛しつづけてきたすべてのひとたちと同一人なのです。おまえが受ける試練の度ごとに、私は自分の顔を蔽いかくしている仮面を一つまた一つ、かなぐりすててきたのです。やがておまえはあるがままの私の姿を見ることになるでしょう……»

この観念は『オーレリア』において集約的な表現を得る前に、既に彼の『ファウスト』解釈に類似の形態で表現されていると、一般的には考えられている。なるほど『ファウスト』末尾を神々しく飾る、あの《das Ewig Weibliche》という崇高な象徴は、ネルヴェルにおける「女神イシス」の象徴と質的に多大の類似性をもっていることは疑えまい。そのため、ネルヴェルが訳文を Mater Gloriosa で止め、大切な Chorus Mysticus を切り捨ててしまっていることを、いぶかしく考える立場が存在する⁽⁷³⁾。しかし、その部分は、ネルヴェルの『ファウスト第二部』の訳出形態から判断すると、幾分異質のものであることは容易に理解されるのである。1840年の段階で、この「永遠に女性的なるもの」というゲーテ的観念は、実は直接的に彼の関心を惹きつけてはいない。彼が切実な思いこめて注目していたのは、容易に推測されるごとく、そのような「女性的なるもの」に解消されてしまわない、言わば「永遠に母性的なるもの」とでも称すべき観念なのである。そのことはネルヴェルが「エピローグ」と題して要約し、又、「天上にて」と題して部分訳した個所を一読すれば、納得される。それはまた、あの「母たちの国」に対して彼が示した偏愛と手を取

り合うことで、ひとつの円環を閉じるのである。

《私は母の顔を見たことが一度もなかった。母は昔のゲルマン人の妻のように、従軍する父のあとについていきたくと願ひ、ドイツの寒い地方で発熱と疲労がもとで亡くなったのだった。⁽⁷⁴⁾》

この訳業の翌年1841年2月、ネルヴァルが最初の精神錯乱に陥ったという事実は、はなはだ示唆的と言わねばなるまい。もちろんそのこととこの訳業が直接的因果関係にあるとするのは、慎しまねばなるまい。しかし、彼がゲーテの『ファウスト』によって触発されつつ展開していった思考が、それ以後の彼の文学的営為を本質的に支配していることは、疑いの余地を残さない。まさしくネルヴァルにとって『ファウスト』は運命的な書物であった。

その関係の初期から、幾分過度に周辺の事柄に触れつつ、われわれは辿ってきたのであるが、それによって、ネルヴァルにおけるファウスト的世界の深甚なる意義が確認されたことで、ひとまず満足しなければならないだろう。

〔註〕

1

- (1) 「新集世界の文学 8 ネルヴァル・ボードレール集」解説より。中央公論社。昭和45年。
- (2) Eugène de Mirecourt, Gérard de Nerval. A. Marie, Gérard de Nerval, P.33, réimp. 1955, Hachette.
- (3) Théophile Gautier: "Natices romantiguse" in "Histoire du romantisme" G. Charpentier. 1877; rééd. 1978, Editions d'aujourd'hui, p. 145.
 ゴーテのこの文章は La Presse 誌に1855年1月27日付で掲載されたものである。すなわち、ネルヴァルが裏路地に縊死して果てた翌日である。追悼のためにあわただしく認められたせいか、全体に興奮の調子が漂っている。恐らくそのせいでこういう極端な物言いに走ったのであろう。
- (4) 『ゲーテとの対話』岩波文庫, 山下肇訳, 中巻153~4 ページ。
- (5) J. P. Eckermann : Gespräche mit Goethe in den letzten Jahren seines Lebens, Artemis Verlag, Zürich, 1948, p. 383.
- (6) その意味で、山下氏のこの部分の訳文は私には少しく腑に落ちない。geistreich にははっきりと「才気にあふれた」という類の訳語をあてて置かないと、全体の文脈から見て筋が通らないし、次の段落をスムーズに導かないと思う。
- (7) Œuvres Complémentaires de Gérard de Nerval, Tome I, La Vie des Lettres (以下 Œ.C.I. と略記する), p.30.
 編者 J. Richer はこの一文の出典が確かめられないために、ネルヴァル自身の筆になるものかどうかも含めて、この文章に「留保」を付けている。確かに文体的に幾分弛緩した点も認められて訝しさは残るが、盛られた内容に捨て難いものがあることは確かだ、ここでは取りあえず先学に倣ってネルヴァルの文章と認めて置く。同所に見られる、例えば「大作家がその称賛者たちに喜んで与えてやる平凡なお誉めの言葉のひとつ」などという表現は、後年ネルヴァルがその仏訳者のひとりともなり、愛情のこもった友人関係を結ぶことにもなったハインリッヒ・ハイネの『ロマン派』に見られる次のような有名な一節との符合もあって、少々出来過ぎの感じは否めない。
 «Das war widerwärtig, Goethe hatte Angst vor jedem selbstständigen Originalschriftsteller und lob und pries alle unbedeutende Kleingeister; ja er trieb dieses so weit, daß es endlich für ein Brevet der Mittelmäßigkeit galt, von Goethe gelobt worden zu sein.» (Heinrich Heine : Die Romantische Schule, Erstes Buch. Werke Bd. 4, S. 43.) (Birkhäuser Verlag, Basel und Stuttgart, 1956) なおこのハイネの文の初出は1833年。
- (8) Ibid., p. 31-32.
- (9) この種のテーマに沿ってひとつの論考を物するということは、本来不可能に近い難

事であろう。とりわけその訳文の吟味に至っては、何重もの隔靴搔痒という外はない。しかし幸い、Cartier. Baldensperger. Dédéyan. Dubruck. Marache といった先学の秀れた業績が存在している。おのずと解釈の相違を来さざるをえない場合も多いが、それら（特に後三者）を参考にしつつ、敢えて愚行を試みることにする。

2

- (10) プイヤッド版著作集の年譜に拠る。以下ネルヴァルの作品、書簡の引用は、特に断わらない限り、二巻本の同著作集第四版（1966年、ガリマール書店）に拠る。CE.I, CE.II と略記する。なお著作集補遺は既に記したごとくCE. C. I. (etc.) と略記する。
- (11) 先行する二種類の仏訳はほぼ同時に1823年に世に出た。ひとつは le comte de Saint-Aulaire によるもので相当杜撰な仕事であつたらしい。もうひとつは Frédéric-Albert Stapfer の訳業で、一般に poésie に欠けるが正確なものと言われている。後者については、エッカーマンの『ゲーテとの対話』1827年5月3日の項に、讃辞が述べられている。ハイネの言にあるごとく、老ゲーテにはどうやら讃辞の安売りの傾向があつたというのもあるがち誇張ではないかもしれない。なおこの二者については後に再び触れる。
- (12) 書簡310. CE. I., p. 1127-28. なお引用個所に続く部分は、ネルヴァルの地上的な悩みの一面を垣間見させる涙ぐましい記述で、割愛は忍びない思いがするので以下に訳出する。「でも僕は忘れっぽくて。こういうことは、記憶力より想像力の方が強い人間には有り勝ちのことですけど。それで今後、僕の創作の才能が衰えることがあつた場合でも、ドイツ語は僕にとって、翻訳にしろ、教えるにしろ、文芸批評にしろ、まじめな元手になってくれるだろうと思います。どうです、前より幾分堅実な考え方をしているでしょう。それというのも、病氣とその後の憂鬱病のおかげで、物の考え方が強靱になったからです。(……)」
- (13) CE.I., p. 136.
- (14) CE.II., p. 1451.
- (15) CE. C. I., p. 91-92. この翻訳はハイネの „Intermezzo“ と „Nordsee“ のことである。
- (16) Ch. Dédéyan, Gérard de Nerval et l'Allemagne, Tome I, p. 37-38. 省略したふたつの場面というのは、「魔女のくりや」と「ワルプルギスの夜」のことである。
- (17) Ibid. p. 36.
- (18) “Faust” からの引用は今後すべて、Goethes Werke, Hamburger Ausgabe, Bd. 3 (Verlag C. H Beck, München, 1976) に拠る。括弧内に行数を記す。なお参考までに高橋健二氏の邦訳（世界文学全集2，ゲーテ『ファウスト』，河出書房新社，昭和44年）をここに引いて置く。

「むかしツールに王ありき。

契りをかえぬこの王に、

こがねの杯を、よき人は

残して、あわれみまかりぬ。」

『ファウスト』の邦訳については、外に森鷗外のものや手塚富雄氏のを参照している。

- (19) Dédéyan, op. cit., p. 36.
- (20) Goethe, *Faust et le second Faust*, traduction de G. de Nerval, *Classiques Garnier*, 1969, p. 114. ネルヴァルの仏訳は今後すべてこの版に拠る。
- (21) Dédéyan, op. cit., p. 48. もっとも第二版以降では「Il saisit le livre…」となっているから、ひどい間違いに気づきはしたのであろう。
- (22) *Faust et le second Faust*, p. XXXI.
- (23) 『ファウスト』原文の解釈については、前記 Hamburg 版の注解と、高橋義孝『ファウスト集注』、郁文堂、1979年とを参照している。以下同様。
- (24) Op. cit., p. 33.
- (25) Ibid., p. 62.
- (26) Ibid., p. 63.
- (27) 詩節2759-82。仏訳, op. cit., p. 114-115.
- (28) CE. C.I. p. IX.
- (29) Ibid., p. VIII-IX.
- (30) Lorely. CE. II., p. 743.
- (31) CE. I. 年譜。
- (32) Ibid.
- (33) 書簡320. CE. I. p. 1145. 参照。

3

- (34) Ch. Dédéyan, op. cit., p. 29.
- (35) Préface de 1828. CE. C. I, p. 5. なお引用されている『ドイツ論』の原文は、Madame de Staël, “De l’Allemagne”, *Les Grands Écrivains de la France*, tome III (Hachette, 1959), p. 70-72のものと差しかえて訳出する。なおそれに付された註釈を参照している。以下同様。
- (36) Ibid; p. 6; p. 73-74.
- (37) Ibid., p. 74-76.
- (38) Préface de 1828, op. cit., p. 6.
- (39) Ibid.
- (40) Op. cit., p. 122.

ネルヴァルの『ファウスト』解釈

(41) Préface de 1828, op. cit., p. 8.

4

(42) M.-J. Durry, Gérard de Nerval et le mythe, 1956; réimpression, 1976, Flammarion, p. 31.

(43) Ch. Dédéyan, op. cit., p. 134-135. なお, J.-J. Ampère のことを誉めちぎったゲーテの言葉は, エッカーマンの『ゲーテとの対話』1827年5月3日及び5月4日の項に記されている。

(44) Ibid., p. 136.

(45) 筆者は上記 Dédéyan に従って引用したにすぎず, その全体を知らないから, 今は評価を保留して置く。

(46) CE. C. I, p. 25, note 3.

(47) Préface de 1840, CE. C. I, p. 12.

(48) Ibid., p. 23-24.

(49) 『詩と真実』のネルヴァルが訳出引用している箇所は, 「第11章」(Elftes Buch) の終りから五分の一ほどのところに見られる。Goethes Werke, Hamburger Ausgabe, Band 9, S. 493, z. 20-36. ネルヴァルの訳文は相当の自由訳である。

(50) J Richer : Préface pour CE. C. I, p. X, 及びその Note 7. 同じく Ch. Dédéyan, op. cit., p. 140.

(51) Ibid. 書簡63. CE. I, p. 871-872.

(52) Ibid.

(53) 幾分煩瑣ではあるが, 後々便利であろうと思われるから, 原作とネルヴァル訳との対照表を作成して掲げておく。

ゲーテ 『ファウスト』		ネルヴァルによる仏訳
第一幕	優美な地方	(全訳) Une contrée riante
	皇帝の宮城 ○王座の広間 ○広々とした広間 仮装舞踏会 ○遊園	} (解説的要約) Examen analytique
	○暗い廊下	
	○明るく照らされた 幾つもの広間	(要約) Une salle du palais

小 沢 晃

	○騎士の広間	(全訳) Dans le vide (ただし冒頭は省略。v.6427以降。)
第二幕	○高い丸天井の部屋 かつてはファウストの部屋 ○実験室、中世ふう 古典的ワルプルギスの夜 ○ファルサルスの野 ○ペナイオス河 ○ペナイオス河の上流 ○多島海の入江	(要約) La chambre d'étude du Docteur Faust (わずか4ページほど)
第三幕	○スパルタのメネラスの 宮殿の前 ○城の奥の中庭	(全訳) Hélène
第四幕	○高山 ○前山の上 ○反逆皇帝のテント	(要約) Le champ de bataille (わずか2ページほど)
第五幕	○開けた地方	(省略) Un palais-Un grand parc-Un grand canal (見出しのみ列挙)
	○宮殿 広い遊園	(部分訳) (見出しは上と共通) (注。冒頭のリュソコイスとフ ァウストのせりふ若干)
	○深夜	(全訳) Profonde nuit
	○真夜中	(全訳) Quatre femmes grises
	○宮殿の大きな前庭 ○埋葬 ○山峽	(解説) Grand vestibule du palais (要約と部分訳) Epilogue ; Dans le ciel (v.12061~12095)

(この部分全体が Hélène の総題でくくられている)

(見出しは高橋健二訳による)

(記載のフランス語はネルヴァルの
つけた見出し)

(54) Ch. Baudelaire : Le spleen de Prais, «A Arsène Houssaye». Œuvres Complètes, «Bibliothèque de la Pléiade», p. 229.

(55) Faust et le second Faust, traduction de G. de Nerval, Classiques

Garnier, 1969, p. 193. 以下やはりすべて同書に拠る。

- (56) Ch. Dédéyan, *op. cit.*; tome I, p. 143.
 (57) *Op. cit.*, p. 195.
 (58) 小栗浩, 『人間ゲーテ』(岩波新書, 1978年), p.198-200. 及び E. Trunz の注釈 (*op. cit.*, p. 537), 及び高橋義孝前掲書, p.197.
 (59) *Op. cit.*, p. 195.
 (60) 訳出が慌しい作業であったことを示す書簡の一節を引いて置こう。参事院請願委員 (Maitre des requêtes) ランゲエ (Lingay) にあてた近況報告。

「(……)」

しばらく伺っておりませんが、どうか御容赦願います。翻訳の仕事に加えて、どうしても念入りに見て置かねばならない芝居などの、初演や再演がこのところ立て込みまして、このひと月というもの、あれやこれやの仕事が輻湊していたところなのです。その間に、ゲーテの『第二ファウスト』を、これは前代未聞の難物でありまして、訳出要約したうえ、詩をいくつか翻訳し、さらに今だに終らない三つの序論つまり序文を書いているのですが、それをすべて、定期的な新聞原稿を妨げないでしなければならなかったのです。(……) 今度出す本は文学的であると同時に文献学的でもある仕事で、以前のものに劣らず重要なものになるだろうと考えております。(……)」書簡62。CE. I, p. 870. Voir : préface pour CE. C.I par J. Richer. 引用の末尾の自負の言葉に注目したい。

- (61) *Op. cit.*, p. 202.
 (62) *Op. cit.*, p. 204.
 (63) *Op. cit.*, p. 206-207.

5

- (64) Préface de 1840, in CE. C. I, p. 11. 以下この「序文」からの引用は、内容に応じて前後を行きつ戻りつするが、煩雑であるから特に注番号を付さない。
 (65) 『シルヴィ』(1, 失われた夜)。入沢康夫訳。中央公論者, 新集世界の文学8。以下『オーレリア』についても、同書稲生永訳を借用する。
 (66) 『ゲーテとの対話』1829年9月1日の項。E. Trunz の注釈 (*op. cit.*, p. 603), 高橋義孝前掲書, p. 367.
 (67) *Op. cit.*, p. 266.
 (68) 高橋前掲書, 同所。
 (69) この部分の原文は, «dans lesquelles elles ont prouvé l'individualité de leur âme immortelle.» であるが, elles という代名詞の使用が幾分不明確で, 意味を取りにくい。今はとりあえず, 文脈に即して, 少し離れてはいるが, «intelligences」と«ombres»を受けているものと解釈しておく。*Op. cit.*, p. 13-14 参照。

小 沢 晃

- (70) 高橋前掲書, p.246。エッカーマンの解釈自体は『ファウスト』そのものに即して見れば, 秀れたものだと思われる。彼が凡庸な記録者ではなかったことは, その解釈によく表われている。
- (71) 『オーレリア』第一部四章。
- (72) 同, 第二部「記憶すべきことがら」
- (73) Ch. Dédéyan, *op. cit.*, p. 143.
- (74) 『オーレリア』第二部四章



(資料の点で, 島途健一氏の御世話になった。記して謝意を表する。)

(1979年11月)